

■好奇心旺盛・研究熱心

信仰心が厚く、毎朝、先祖にお参りをし、仏前に水をあげる。旺盛な好奇心と研究熱心から、「ポールトレーラー」の改良に苦心していたとき、亡父が枕元に立ち、「北海道で父と一緒に見た馬櫃（ばそり）を思い出せ」とヒントを与えられて解決した。また、「ドーナツオーガの接手」の接続技術の改良に苦心していたときも、亡父が枕元に立ち、ヒントを与えられて解決した。

■信条・趣味

社訓は「健康」、「正直」、「動」の3つ。座右の銘は「賢者は歴史から学び、愚者は経験におぼれる」。

学校時代は、長距離マラソン5,000mに3年続けて優勝した。相撲も得意。

社員の生活環境をよくするために、一番最初に20世帯の社宅を本社の脇に建てた。

社員とのコミュニケーションが大切と、建設関係は毎月第3土曜日に、全従業員で食事会、安全の話し合いをする。運輸関係は、毎月第4土曜日に食事会をする。その他、「腹を割った話し合い」のために、グループごとに「ノミネーション」をする。

趣味は民謡で、飛騨白川郷の“古代神”が得意とか。

激務ゆえ健康にはくれぐれもご留意を。

(事務局 葭田誠作)



ここにこんな人が

私の1/2履歴書

(株)高知丸高 代表取締役社長 **高野 広茂**



高野 広茂 (たかの ひろしげ)

昭和12年高知県生まれ。昭和42年有限会社高知丸高運輸を設立、代表取締役社長に就任。平成6年株式会社高知丸高改組、代表取締役社長に就任。

平成12年6月、私は平成11年度「土木学会技術功労賞」に選ばれた。ユニークな基礎工事技術を開発・実用化、また南国市に温泉施設やギャラリーを備えた岡豊苑（おこうえん）を開設し芸術活動を支援するなど、地域文化への貢献も評価された。

機械を見れば工法が頭に浮かんでくる。いつも考えていれば発明はできる。技術革新挑戦。

ダウンザホールハンマ工法においては、特殊改造によってあらゆる地層長尺に挑戦している。沖縄県北部の運天港は、地盤が琉球珊瑚結晶石灰

岩で空洞も存在し、しかも急斜面の現場。その現場で中掘工法、最長80mを超す削孔に成功し、その技術を証明してみせた。さらに、特許認可されたSqCピア工法も開発。この工法は、施工時の安全を増し、工期短縮が図れるほか、環境保全にも絶大な効果をあげている。東洋一のアーチ橋といわれる広島県空港大橋をはじめ、秩父・滝沢ダム、新潟・広神ダムでも採用された工法だ。

高知は、基礎工事専門の業者が林立する全国でもめずらしい地域。理由は、他県よりも台風災害の復旧工事が多いからといわれる。私が基礎工事を手がけるようになったのも、台風の復旧工事がきっかけだった。だが、先輩のライバル業者は多い。また、あとからはじめた者が仕事を奪うわけにもいかない。直感的に彼らと同じことをやっていたらダメだと思った。

業者のレベルをアップさせたと考えられる。誰もが難しいという現場こそ、自分が挑戦する道。毎日が勉強。自分たちの現場で格闘しながら、さらに他の業者たちの現場も見て回った。県内外を問わずにその現場を踏み、全国の業者との競争の中で技術を磨いていった。

工法というのは、機械との連動。つまり、機械あつての工法なのである。機械を買うときも、つくるときも、ひとめぼれ。その機械を見たとき、工法が頭に浮かんでくる。「PTC100HD」（フランス）の購入時など、周囲からは無茶な買い物といわれた。だが、この機械からも、独自の工法を生み出した。昔は能率をあげるため、大型機械を購入していたが、最近は環境に対して負荷の少ない分解型を導入している。

経営のトップとして徹底していることは2つ。まず1つは朝のミーティングだ。6時50分から約1時間にわたって報告と連絡、その日の不安全行為を防ぐ作業心得の確認、さらに若手社員への教育を行う。「うるさくいうのはあいさつ」。職人は無口でいいというのは間違い。声をかけあうことこそ、「安全への第一歩」だ。そして、機械への愛着。100台近くある建機は、6,000坪ある工場内の屋根付き倉庫に収納してある。決して野ざらしにはしない。

無駄といえど、公共事業の発注方法も改善の余地はたくさんある。本来なら、基礎なら基礎の専門業者をできるだけ多く参加させ、環境、安全、工期、経済性などの意見交換をして採用すべき。現場では、近隣の環境状況や作業ヤード、機械の搬入路、土質などの問題があり、どの工法なら最適なのかを、専門業者で知恵を出し合えば、安く早く仕上げることができる。それはまた、血税の無駄遣いを防ぐことになるはずだ。

これからは、企業規模の大小ではなく、理論を伴った“真の技術”をもっているかどうかが問われる時代だと思われる。そのためにも、挑戦はまだまだ続く。厳しい時代。トップが一番手を抜くわけにはいかない。(株)高知丸高 高野広茂

編集後記

21世紀最初の1年は大変厳しい年でした。今年も引き続きより厳しい1年が予想されますが、新年を迎え皆様には心新たにお過ごしのことと存じます。年頭にあたり、三谷会長より『ここ一番踏ん張って、明日の飛躍に備える気持ちが大切だ』とのお言葉をいただきました。

年末の多忙中、協力いただきました執筆者の皆様と取材に協力いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

(編集分科会)